



ぬにさまとぬれ

～カインの逡巡・黒騎士紀行～
渡来亞輝彦

「あにさまー！ あにさまー！」
弟の声が明るい。

「あれなにー？」

「ねー、あにさまー！ あにさまって

ばー！」

弟の体力は無限だ。好奇心も無限だ。

ニンゲンの子供でいうところの、六、七歳くらいだろうか。そのくらい
の大きさの弟だが、とにかく体力も好奇心も無限大だ。

かつて、彼本人から「餓鬼の世話は大変なんだ。特に小さいのはなー、加減つーのをしらんから」とのぼやきをきいたことがある。だが、きつとそれでも疲れたら寝てしまうであろう本当のニンゲンの子と違って、大して睡眠を必要としない黒騎士である弟の体力は本当に無限大なのだった。

私は当時は子供は苦手で、裏方の方を担当していたから、ニンゲンの子供
の特性など知らなかった。知っていたら、きつともつと対処の方法があった
と思う。

「もつと勉強しておくべきだったな」
「なにがー？」

弟がいきなり隣の岩陰からひよこん
と顔を覗かせる。わつと私は驚く。

「ネザアス、いつからそこに」
「今だよ。あにさま」

えへと笑って彼は小首を傾げる。

「なんで？ あにさまは頭いいのに、
なんで勉強するの？」

「そんなことはない。私はものを知ら
なすぎるんだ」

「そうかなあ。おれはもつとしらない
んだ。あたまわるいし」

弟はぼやくように言ってからにこり
とした。

「だからなー、ほんよんで勉強したんだ！ あにさまみたいになりたかったからなっ！」

そんな弟の屈託ない笑顔に、私は何故かちよっと胸を締め付けられるのだった。

兄様みたいになりたかった。

あの時、彼が必死に難しい本を読んでいたのは、本当にそんな理由からだったのか？

＊

私と弟は、前線から帰るためにベースを目指していた。しかし、そもそも不審な姿の我々は味方のなかなか協力を得られず、我々二人でこのフィールドを進まねばならなかった。

私と弟の旅する場所は、元々は戦闘用、つまりバトルフィールドとして作られたわけではなく、娯楽施設や住居

の一端だったらしいが、今回の黒騎士叛乱により、一般市民を排除して戦場とした場所だ。

ナノマシンで作られた人工生命体というべき、戦闘用黒騎士の我々にとつて、そこはただの市街戦の戦場のような場所であった。

が、それは大人の姿の我々の場合だ。

記憶のある私はともあれ、記憶を喪失し精神年齢も外見と同じになっている弟の場合、そこは物珍しいもので溢れた好奇心を刺激する遊び場にしかみえないらしい。

廃墟と化したそこには、さまざまなものが残されていた。汚染されたここに住人が戻ることはもうない。残されたものは有効活用させてもらうこともある。

「あにさまー、絵本見つけたよ！」

弟が嬉しそうに本を抱えて帰ってきた。弟は探索が好きだ。

「なーなー、一緒に読もう！」

「そうだね。後でな」

「うん！」

そんな様子には私は微笑んだ。

「うん、ネザアスは楽しそうで良いな」

「そうかな？」

「そうだよ」

「それはなー、あにさまと旅するの楽しいからだよ」

そう言っただけで笑う弟は、どう見ても普通の子供だった。

＊

「はア？　なんて？」

控室に戻ってきた弟は、私の言葉にぶつきらぼうに聞き返す。

「なんだよ、ドレイク。なんて？」

道化師のようなコスチュームを着てい

た弟は、着替えるところだったらしいが、私の問いかけに露骨に顔を顰めた。

「兄貴よ、アンタ、そんなこともしらねえのかよ。チツ、マジでつかえなーな。つたくトロくせえんだよ！」

娯楽施設の一角にあたる遊園地は、我々の職場であった。戦闘用、しかも、黒騎士としては初期ロットの我々が、なぜそんなところにいるのかというと、ありていにいうと左遷だった。

旧型の我々は主戦力として前線に立たせてもらえなかったのだ。我々に与えられたのは、福利厚生、慰安施設であるこの遊園地の管理業務だった。

捻くれ者で皮肉屋だが、少なくとも私よりはコミュニケーション能力のある弟は、ゲートで子供のナビゲーションをしたり、ショーにも出たりしていた。

本来好戦的な彼にはこの任務は相当の屈辱だったはずだが、意外にも真面目にこなしていた。しかし、弟はこのと

おり、私に対しては刺々しい態度が多かった。元から態度や素行も良くない弟だが、私には特に。

仕方がない。兄弟とはいえ、材料が同じ型番のナノマシンを分け合ったというだけなのだ。ニンゲンでいうところの家族の情というものがいまいち理解できていない。

「ちゃんと勉強をしろよなー、アニサマ」

などと嫌味をいいつつ、質問内容には答えてくれたものだが、嫌われているのかと思っていた。

そんな粗野な弟だったが、意外と読書は好きだった。電子書籍でも読んでいるのかと思ったが、控室で一息入れるときに読んでいるのは、どこからか回収してきた紙の本だった。

勉強熱心ではあり、読んでいる本は娯楽小説から漢籍、外国語の教本、百科事典と何でもござれだった。こちらが感

心してしまうほどだ。この娯楽施設に閉じ込められた我々の関係は、良好とまでは言い難い。私が無口なせいもあり、彼とは必要以上の会話はなされなかった。ただ、弟は、沈黙が支配する控え室で独りごちることがよくあった。

「まったく、餓鬼つてのは大変だよなー。無限の体力あつて、好奇心も無限だから。あれはなに、これはなににつて、質問される身にもなってみろつてもんだよ」

弟のそれは長いこと、裏方の仕事を回してもらっていた私に対する当てつけかと思っていたが、今思うとアレはもしかしたら私に雑談を振っているつもりだったのかもしれない。私が無口なのを承知の上で、彼なりに気を遣って話をしたのかもしれない。

「今度はアレ調べてこいってさあ。つたく、今日中に調べて解答しなきゃな

らねえじゃねえか。あー、クソが。やつてらんねえ」

そんなことを言いながら、弟は多分子供が好きだった。

当初は任務だから仕方なしに応じていたが、途中で本当に子供が好きになっていたのだと思う。そんな社交的な彼は閑職でも充実しているように見えた。当時の私には、なんだかうらやましく眩しい気がしたものだ。

＊

「あにさま、どうしたの？」

絵本を持ったまま、弟が小首を傾げた。

私と弟がこの姿になったのは偶発的なものか仕込まれたものかはよくわからない。

ただ十から十二歳ほどの少年の姿である私より小さくなり、記憶も失ってしまった弟だった。この姿になったのは、彼がこうなる直前の戦闘で負った大怪我に

よって完全な姿での再生がむずかしかったこともあるのだろう。きつとそれも実験なのだろう。彼は私がどうするか、観察しているだけだった。

「あにさま？」

きよとんと弟が私の顔色を不安そうにうかがう。

「あにさま、元気ない？」

「ううん、なんでもない」

「そうだいいけど。ねえねえ、あのねえ、あにさま。この絵本すごいよ。」

絵が綺麗なんだあ。見てみて」

弟が私を元気づけようとぺらっと絵本を開く。かつての弟は、私に皮肉しか言わなかったのに、今の弟は私をひたすら称賛して励ましてくれる。どっちが本当の弟なんだろう。

不意にそんなことを考えた。

「そういえば、ネザアスは、どうして私をあにさまと呼ぶのだ？ 兄さんとか色々あるし、昔はドレイクという名前か、兄貴と呼んでいたろう？」

「んーとね」

ネザアスは悪戯っぽい顔になる。

「あにさま、かつこよくてつよくて頭いいの、にいさんっていうだけだと表現できなさそうだろ。あにきはなんかイメージ違うし、でも、あにうえって今どき古いよね。おれ、悩んだんだよー」

弟はにこりとする。

「で、すーごく調べて決めたんだ、あにさまって呼ぼうって。でも人前だと恥ずかしいからあにきにする」

そう言われて私は思い当たる節があった。

ごく稀に弟は「アニサマ」といって私を揶揄うようなことがあったけれど、それは決まって二人だけの時だった。

「あれっ？　もしかして、それって、ここに来る前からなのかい？」

「そうだぞー。でもなー、前はあんまりよべてなかった。だって、ほかのひといるかもしれないから、はずかしいだろ」

弟は楽しそうに笑う。

「ここにきたから呼べたんだよな。だからここであにさまと旅できてよかったー」

素直に私を慕う彼と、私に皮肉を言う彼と。彼の本心がどちらかは、私にはわからないけれど。

「そうか、私もそうだよ」

私は、その言葉に救われる。

「ネザアス行こう。次の目的地まで」


私は弟に手を差し伸べる。うん、と弟が答えて手を繋いでくれる。

私たちをここに残した創造主へ力

ミのことを私は怒っていたけれど。

こうして私たちに子供の世界を味わうきっかけをくれたことに、私は感謝をしたいと思う。

あにさまとおれ・終



『あにさまとおれ』
2023/2/25 発行
ぺらふえす2023参加
渡来亜輝彦



幻想の冒険者達
<http://ship2adoventurer.fc2web.com/>
[twitter:@fourdart](https://twitter.com/fourdart)